

聴解活動における協働

— 語彙の拡大の視点から —

市嶋 典子

【キーワード】最近接発達領域・スキヤフォールディング・協働・水平的相互行為
語彙の拡大

1. はじめに

従来の日本語教室において、聴解活動のための独立した授業は珍しく、聴解のために多くの時間が割かれることも少なかった。また、主に初級や中級のレベルの聴解教材は既習の文型や語彙を確認するために、補助的に使用されるにすぎなかった。その日に学んだ文型や語彙が文脈に含まれている教材をその都度選択するだけで、特定の教材を聴解力要請の目的で計画的、長期的に聴くことはあまりなかった。また、聴解の授業ではテープを聴いた後、各自でテープの内容に関する設問を読み、答える形式が一般的で学習者は書かれた答えを機械的に選択していくだけでよい。そうすると、教師には学習者がテキストの内容をどのように考え理解しながら聴いているのかは分からない。結局教師は学習者の理解度を、選択された答えによってしか把握することができない。このような形態では、教師と学習者の一問一答形式の教室活動しか成り立たないことになってしまう。

岡崎は(2001)は、聞き手は話し手を目の前に見て聴いており、「見ることができる」ということは、理解の上で大きな役割を果たすとし、聴解練習は必ずしもテープ付で行なう必要はなく、クラスの全体活動では教師がグループやペア活動では仲間の学習者が話すことを聴きの素材とすることを、もっと積極的に取り入れてもよいと述べている。一方、聴解以外の活動に目を向けてみると、館岡(2005)は、読解授業において、読解の過程や理解の結果が可視化されていないことを問題とし、クラスの仲間と対話することによって、自分の読みの過程を相手に語る形で外に出すことにより、「過程」そのものも扱うことができるとし、「ピアリーディング」を提案している。ピア活動については、池田(1998、2004)が、作文活動においてピア・レスポンスを提案している。筆者は、聴解活動においても、テープの音声を自己完結的に聴き取る練習から、教室参加者が相互に発言することによって、理解のプロセスが確認しあえるような協働的な聴解活動に転換していく必要があるのではないかと考える。つまり、読解や作文の授業で提案されているような協働的な教室活動のあり方は、聴解の授業でも大切なコンセプトになりうると考えている。

そこで本稿では、教室参加者（教師、学習者、実習生）の相互行為を分析し、聴解の実践において、どのような協働学習が行なわれたかを考察したい。

2. 第二言語教育における協働学習

Oxford(1997)は、協働学習を、有能な者からの支援、ZPD に基づくものであるとしている。ヴィゴツキーの「最近接発達領域(zone of proximal development :ZPD)は、自力では解決できないことを大人や他人が援助したとき、解決できる領域を指す。佐藤(1999)はヴィゴツキーの、「有能な者が未発達な子供を援助する」という捉え方を、「能力だけの固定的な特性だけではなく、違った視点、別の考え方を持つものが支援する」と解釈し、垂直的関係を水平的関係へと広げた。学習者同士が、各自の持っている最近接発達領域を刺激し合い、理解を促進させていくことができれば、関係性は教師対学習者という垂直関係から、学習者同士の水平関係へと発展していくと考えられる。垂直的相互作用の支援形態としては、スキヤフォールディングが考えられる。スキヤフォールディングとは、有能な他者が「足場」をかけることによって、学習主体の行為を方向付ける過程を指す。教室活動において、教師は学習者に多様な場面でスキヤフォールディングを行っている。一方で、スキヤフォールディングの多用は、教師対学習者という二項対立、または依存関係を成立させることにもなりうる。そのような関係性が固定化してしまうのを回避するためにも、教室活動の中で、教師対学習者のやりとりから学習者同士のやりとりへと発展させ、水平的な相互行為を生み出すことが必要になると言える。そのためには、「協働」が重要なコンセプトとなると考えられる。『新教育事典(2002)』のコラボレーションの項では、コラボレーション学習の肯定的な側面として、第1に「メンバー間のやりとりによって得られる認知的な学習効果」を、第2に「共同活動を営む上で必要とされる社会性、協調性、共感能力の育成、動機付けの向上」を指摘している。筆者は本稿で「協働」を、他者との水平的な相互行為によって、相互に学びあうことと捉え、学習効果を促進するものと定義したい。

3. 聴解における協働学習

聴解という個人的な活動においても、その過程に他者を介在させることによって、協働的に聴解学習を促進させることができないだろうか、という問題意識が本論文の執筆動機である。聴解活動は、自己と音声の間の単なる往来を指すのではなく、互いの発言を聞きながらそれをヒントにし、自分の答えを導き出していく活動としたい。一人では理解することができなかった内容を、他者と協働的に考え、照合しあうことによって聴解力も養成されるようになるのではないかと考えている。聴解活動において、教師の働きかけが大切であることは言うまでもないが、学習者同士の水平的な相互行為も重要であると言える。そこで具体的な聴解実践から、教師の働きかけから学習者同士の学びあ

いに発展するプロセスについて検証し、聴解活動における協働学習について考察したい。

4. 聴解教育の実践

早稲田大学別科の聴解クラスの実践を例に、聴解活動における協働学習について考察する。

授業日時：2005年6月20日（月） 3時限

対象クラス：早稲田大学別科 聴解6A

授業の目的：吉岡（2005）は、聴解クラスの目標を以下のように掲げている。

- 中上級語彙の習得（講義などで使用される書き言葉や、やや俗っぽい話し言葉を含む）
- ニュースなどの正確な聞き取りの再生
- 短めの講義、講演などの要旨把握
- 未知の語の推測

教材：NHK 首都圏ネットニュース『多摩ニュータウン 40年』

院生は3つのグループに分かれ、グループごとに聴解教材を選択し、授業の指導案を作成した。使用教材はビデオとし、主にNHKの「首都圏ニュース」から選択した。

指導案の他にも、教材に沿ったワークシートやスクリプトを作成し、内容に関連した発展練習の計画を立てた。最終的に、教室担当者が全ての内容をチェックし、教材と授業の流れが決定する。教室担当者がその流れにそって授業を行なう。

分析理由：授業の回数を重ねるごとに、学習者が授業の形態に慣れ始めていった。『多摩ニュータウン』の授業に至る頃には、学習者が積極的に発言する様子が多く見られるようになり、協働的に問題に取り組む様子が観察されたため。

分析の視点：未習の語彙をどのような協働的なやりとりを通して理解へと結びつけ、発展させていったかを分析する。

授業の流れ

1) 導入

ビデオの内容と関連した話をする。具体的には、団地や丘陵地帯の写真を見せ、多摩ニュータウンについて確認しながら、ビデオの内容に関連付けていった。

2) 全体視聴（概要理解）

- ・ ビデオを通して一回視聴する。
- ・ 聴き取れたことを要旨ワークシートのメモ欄に記入する。

- ・ 数名の学生に要旨を発表してもらおう。
- ・ 要旨ワークシート回収

3) 段落視聴

- ・ 段落ごとに視聴し、要旨を言ってもらおう。
- ・ 聴き取りにくい部分については、一文ずつ確認していく。
- ・ 新出語彙や文型、表現の確認を行なう。

4) 練習問題

学習者がニュースの内容を理解しているかどうかを確認するための練習。ニュースの内容に関する簡単な質問をのせたワークシートを配り、回収する。

5) 発展練習

ニュースの内容に関連したゲームや話し合いを行なう。発展練習の活動は、院生が担当する。『多摩ニュータウン 40 年』の授業では、語彙理解度チェックのために、クロスワードパズルクイズを行なった。

ニュースの談話例

記者：多摩市の永山団地です。ニュータウンの中では最も古く、昭和46年に入居が始まりました。この団地のオープン当初の写真です。若い夫婦や親子連れが、連日のように買い物に訪れ、大変な賑わいだったと言います。しかし今は、空き店舗が目立つようになりました。商店街にあった20あまりの店のうち、オープン当初から続いている店は、わずか6店しかありません。

利用客1：いろいろなお店があったんですよ。それなのに、みんなほら、寂れちゃった。

あんまり来なくなっちゃったでしょ。

利用客2：ちょっと寂しいですよ、やっぱね、今ね。ええ。

教室の談話例1 (T:教師 S:学習者 J:実習生)

1T:この人は寂しい。でも街はどうなった?

2S1:空き店舗が目立つようになった。

3T:空き店舗が目立つ。そうですね。その後の人はなんか言わなかった?

4S2:さびる・・・だとか

5T:なんていった?さび・・・

6S3:れる

7S4:漢字は?

8S2あります。

9Tどんな漢字ですか？

10S2寂しいの字

ここでは、教師が既習語彙である「寂しい」を例に出し、未習語彙である「寂れる」を学習者から引き出している。その後、「寂れる」という語彙を巡って、学習者間でやりとりが始まった。7でS4は、「寂れる」の漢字について質問している。教師は質問に直接は答えず、9で学習者に質問をふりかえし、学習者から答えを引き出している。

教室の談話例2

この後、学習者の発言から教師は「寂れる」の語彙を「錆びる」に発展させていく。

1T：寂しい、街が

2S1：さびりちゃった

3S2：さびちゃった

4T：錆びるという動詞がありますね。・・・錆びるの動詞は何の意味？

・・・錆びるってちょっと違う意味・・・錆びる、錆びるというのは、はい、院生

5J：錆びるのは、鉄とかが、水がついて古くなったりすると、赤くなって黒くなったりする事です。で、まあ、錆びるです。わかりました？

6T：鉄はさびるというけど、私がさびるとは言わない。

3S2が、「さびちゃった」と発言したのをとらえ、教師は「錆びる」の意味について学習者に問いかけている。学習者からは、答えが出てきそうもないと判断すると、今度は実習生にその意味を確認している。教師が語彙の意味をすぐに与えてしまうのではなく、あくまでも学習者や実習生に意味や定義を考えさせ、引き出そうとしていることがうかがえる。そして最終的には、6で教師が「さびる」の使い方を確認している。

教室談話例3

「さびる」をめぐる、この後、「わびさび」「寂びる」へと発展していった。

1S1：わさび

2T：わさびは違う

3S2：さびとわび

5S3：わびさび・・・

6S4：「寂れる」の漢字を使っている、「さびる」の意味はありますか？・・・もう一個あるなんか昔の・・・

この段階になると、教師が引き出さなくても、学習者の方から次々と「寂れる」に関連した語彙が出てくるようになっていった。始めのうちは、教師が学生から語彙を引き出し、意味の確認を振ったりする働きかけがみられたが、次第に教師が振らなくても学習者同士で関連した語彙へと発展させるようになっていく様子が見られるようになってきた。「わびさび」の語彙が示されたときには、学習者、実習生から感嘆の声が挙がった。ニュースの語彙とは意味的には直接関係のないものではあるが、学習者が「寂れる」の漢字から、自分たちの知っている語彙を導き出し、示しあうプロセスは、「協働」であると言えるのではないだろうか。

以上のような例の他にも、文章理解や要旨把握においても、学習者同士の協働的なやりとりが随所で見られた。学習者同士のやりとりに発展させるためには、教師のスクーフォールディングや働きかけがきちんとなされることが前提で、段階を経て、教師対学習者から学習者対学習者のやりとり、「協働」へと発展していく。また、授業において教師は多くを語り、全てを説明するのではなく、学習者に主体的に考えさせ、発言させる機会を多く作り出すことが大切であると言えよう。

5. 考察

以上のように、実際の聴解の実践から教室参加者（教師、実習生、学習者）の相互行為を分析し、聴解の実践において、どのような「協働」が成立したかについて考察した。その中でも、「語彙拡大」に焦点をあて、教師がどのように働きかけ、そのことによって学習者がどのように考えていったかを分析した。その中で、教師は、学習者に考えさせ、発言させる機会をできるだけ多く作り出すことが必要であるということが分かった。

従来の聴解の授業のような一方的な授業形態ではなく、教師と学習者の協働、学習者同士の協働を生み出すことによって、聴解活動の新しい可能性が見えてくるのではないかと考えられる。読解や作文、口頭表現の分野においては、協働学習は定着しつつある。聴解においても協働のコンセプトを積極的に取り入れ、従来のテープや教師による一方的な授業形式から、学習者が共に学び合える学習環境を設計することが必要なのではないかと考えている。

6. おわりに

授業の最終日に、皆でパーティーを行なった。その際、学習者に一人ずつ授業の感想を述べてもらった。印象的だったのは、「緊張せずに楽しく勉強することができた」、「何でも話せる雰囲気良かった」というような肯定的な感想が多かったことである。もし一方的にテープを聞かせ、答えを求めるような単調な授業であったとしたら、先に挙げたような感想は出てこなかったのではないだろうか。教師、学習者、実習生という教室

参加者が協働的に学びあえた環境であったからこそ出てきた感想であると言えよう。「協働」は聴解に限らず、日本語教育全体にとっても重要なコンセプトであり、今後も考えつづけて行きたいテーマである。

参考文献

- Oxford, R. 1997 Cooperative learning, collaborative learning and interaction :Three communicative stands in the language classroom. The Modern Language Journal
- 池田玲子 (1998) 「日本語作文におけるピアレスポンス」『拓殖大学日本語紀要』第8号
- (2004) 「日本語学習における学習者同士の相互助言」『日本語学』vol. 23
1月号 明治書院
- 岡崎眸・岡崎敏雄 (2001) 『日本語教育における学習の分析とデザイン—言語習得過程の視点から見た日本語教育』凡人社
- 尾澤重知 (2002) 「コラボレーション」遠藤克哉監修『新教育事典』勉誠出版
- 佐藤公治 (1999) 『対話の中の学びと成長』金子書房
- 館岡洋子 (2005) 『ひとりで読むことからピアリーディングへ—日本語学習者の読解過程と対話的協働学習』東海大学出版会
- 吉岡英幸 (2005) 『2004年秋学期 聴解教育実践レポート集』早稲田大学大学院日本語教育研究科

(イチシマ ノリコ・修士課程1年)